旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

松江高等学校

（上）

ハーンへの憧憬から松江に

——若松　秀俊

◇19◇

今回は、フリッツ・カルシュが松江に来ることになった経緯と、その後の様子をやや詳しく語りたい。

ニコライ・ハルトマンのもとで、ともに学んだ後の東大教授・長屋喜一との出会いが直接の誘因となったことは既に述べた。カルシュが長屋にドイツ語を親身になって教えたことが、生涯の友情に発展して行くきっかけになった。

長屋がどういう経緯で和歌山高等商業学校と松江高等学校のドイツ語講師の職をフリッツに紹介することになったかは分からないが、そのころ、創立間もない二つの高校でドイツ語教師を捜していたことは間違いない。実はこれ以前にも日本の文部省はドイツ語の、いわゆる「お雇い外国人」を募集していた。しかし、これは関東大震災で中止になったという。いずれにせよ、松江を選んだのは、何といってもラフカディオ・ハーンへの憧憬（しょうけい）の潜在意識であったろう。

ドレスデンの博覧会で日本と出会って以来、持ち続けていた異国文化への興味が誘因であったろう。とにかく、彼にとっては来日は運命というべき形で近づいてきた出来事であった。

としても、フリッツは自分が松江に根づいて、生涯の最も重要な時期をこの地で生活するなどという気持ちはほとんどなかったと思われる。第一次世界大戦後は時代の潮流の中で、職もなく、とにかく新婚の二人にとって生活のための、やむを得ずの選択であったようだ。長女メヒテルトが日本の学校へ行かなかったのも、やはりドイツの文化に根ざした素養を彼女に身につけさせたかったからで、すぐにも帰国を考えていたからであろう。

ところで、松江の東、中海の近くにそびえる嵩山（だけさん）がある。嵩山は高い山を意味する山だ。それゆえ、松江高校の生徒には崇高なシンボルであった。当時の学生寮である自習寮の丘からの見晴らしはよく、和久羅山（わくらやま）と楽山（らくざん）とともに、乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔から寝仏（ねぼとけ）と呼ばれていた。生徒はロマンを託して「メッチェン山」と呼んでいた。その麓でみんなが思い思いの学園生活を楽しんでいた。

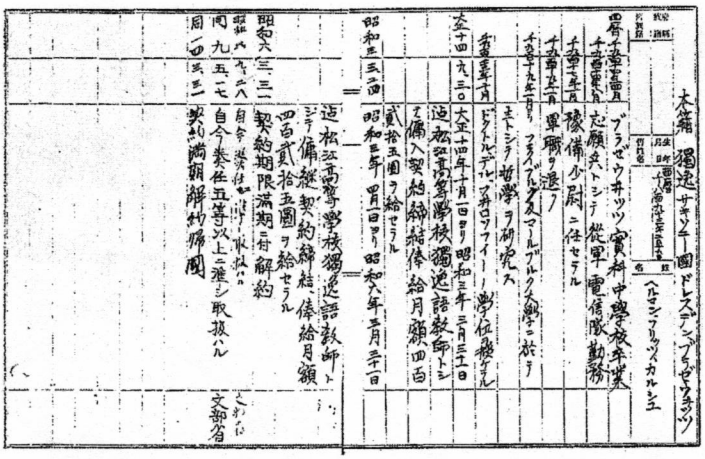
この地に青春のすべてを包んでくれる土地柄を感じ、運動に勉強に励んだところで、生徒たちにとっては高校生活の象徴でもあった。フリッツにとっても日本での生徒との交わりの象徴となる、強い縁で結ばれる土地となった。

その周辺の気に入った景色や建物を描くために、彼は画紙集とパステルをもってよく散歩に出かけた。そして、この地と、ここに住む人々を愛し、やがて彼にとって第二の故郷となっていった。

ところで筆者がカルシュの調査のなかで最初に入手したのが、日本語で書かれたカルシュの職務記録である。松江高校就職時から退職までの公的な経歴が、島根大学で発見されたわけである。これを見つけてくれた人は当時の三原隆総務人事係長である。ほとんど資料が手に入らない段階で協力してくれた同氏に改めて感謝の意を表したい。

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝



カルシュの職務記録（島根大学所蔵）